無常佛性の考察

河村孝道

道元禪師の宗教思想の展相は佛教の深い傳統思想を基盤とし乍らも、其上に自己の身證體驗を通した宗眼の獨自性に依る展開であつた。是事は本稿が考察せんとする正法眼藏佛性卷に於ても顯著にみられる處である。是處には禪師の獨自なる佛性の展相としての「無常佛性」を取上げ考察したい。

㈠、佛性卷第六段には涅槃經の常・無常の眞義を明かし、以て佛性常住思想を闡明せる六祖慧能の見解――「六祖示二門人行昌一云、無常者卽佛性也。有常者卽善惡一切諸法分別心也」を擧げられて、それを佛性の眞義として拈提されている。この無常佛性說は初期の禪宗關係資料に於ては見出しえず、六祖を以てその嚆矢とするものである。行昌は壇經に於て「經說二佛性是常一、和尙卻言二無常一。善惡諸法乃至菩提心皆是無常、和尙卻言二是常一。此卽相違、令三學人轉加二疑惑一」と、それが全く異質な說であることに疑議している。是は道元禪師にあつて、佛性卷に「一切衆生悉有佛性・如來常住無有變易」を擧示して佛性論立の基底とされており乍らも、他方この六祖の佛性無常語を拈提されていることと照應して、是等の矛盾は如何樣に解さるべきかが問題となる。

㈠、六祖は壇經に於て「汝知否佛性若常更說二什麼善惡諸法一。乃至窮レ劫無レ有下一人發二菩提心一者上。故吾說二無常。正是佛說眞常道也。又一切諸法若無常者卽物物皆有二自性一容二受生死一。而眞常性有二不徧之處一。故吾說常者正是佛說眞常常義」と答えている。斯かる六祖の視點を更に高次に道元禪師は(1)「無常のみづから無常を說著行著證著せんは、みな無常なるべし。今以現自身得度者、卽現自身而爲說法なり。これ佛性なり。さらに或現長法身、或現短法身なるべし。常聖これ無常なり、常凡これ無常なり」、(2)「常者未轉なり。未轉といふは、たとひ能斷と變ずとも、たとひ所斷と化すれども、かならずしも去來の蹤跡にかかはれず、ゆゑに常なり」と、その無常と常住との眞義を敷衍され、其處に佛性そのものの本質相を明かされている。外道二乘の如き斷常二見の對待的分別で以て常・無常をみ、佛性及び一切諸法を測度すべきでな

く、それを超えて却つて其等の見解の出づる以前の無爲法・無相の實態を無常と言い、從つて一切の存在は無常みづからの現成の姿であり、その無常が無常なる儘に一切諸法の各々の住法位の相として現成している當相が卽ち「常者未轉なり」と言われる佛性常住の眞義たる謂である。卽ち無常が一切諸法の實態であり、この實態の上に諸法の現成がありえている、正に其事實が佛性未轉の無邊際常恒性に外ならず、それが一切悉有の絕對的眞實であると示されるのである。

㈠、常・無常の眞義が斯く道取される根據は何に因つてであろうか。是を要するに「色ハ無常ナリ、受想行識ハ無常、一切ノ行ハ無常ナリ」、「諸行ヲ觀ズルニ悉ク皆無常ナリ、云何ガ知ルヤ、因緣ヲ以テノ故ナリ、若シ諸法ノ緣ヨリ生ズルコトアルモノハ、則チ無常ナリト知ル」、「一切ノ有爲法ハ無常ナリトハ、新々ニ生滅スルガ故ニ、因緣ニ屬スルガ故ニ、增積セザルガ故ナリ……生ズル時來處ナク、滅ニモ亦去處ナシ、是故ニ無常ト名ヅク」、「皆是レ因緣和合ノ生ナルガ故ニ無自性ナリ、無自性ナルガ故ニ畢竟空ナリ」等とある如く、歷史的には原始佛敎に於ける緣起無常觀より大乘佛敎への流れ、特に龍樹に依つて無自性・空という實踐的行觀にまで深化せしめられた無常の實踐的把握としての般若の空に歸因する。空は無常現成のあり方を示すものであつて、「般若波羅密ヲ行ゼント欲セバ、色コレ無常ニ住スベカラズ、受想行識コレ無常ニ住スベカラズ。何ヲ以テノ故ニ。無常・無常ノ相、空ナリ。無常空ノ故ニ無常ト名ヅケバ、空ヲ離レテマタ無常ナシ。無常スナハチコレ空、空スナハチコレ無常ナリ」が示す樣に、諸法現成に於ける緣起無相の實態をその現成の相の儘に把握し生かしむる實踐的歸趣であつた。斯かる空觀を背景として涅槃經の佛性常住思想の展開がありえ、そこに著眼しての無常佛性の道取に外ならなかつた。それは空の佛性への深化・展開であると同時に原始佛敎の無常觀への還歸でもあつたと言いうる。

㈡、「佛性者第一義空……十二因緣佛性」、「佛性非常非無常」、「佛性者謂覺塵及一切法、從レ緣無性名爲二佛性一」と說かれる緣起・無自性・空こそ無常內容の指語であり、然もこの法起法滅の緣生の無常の姿が佛性そのものの事實であり、それが吾々を通貫する原本的なる眞實相に外ならない。佛性卷には「什麼物恁麼來」を佛性の本義とし、そこに無佛性・有佛性を說立されているのも、蓋し斯かる緣起無相の法に著眼してのことであり、一切存在の無常現成して斯く生きいきとありえていることの絕對的事實を指向するが故である。斯くみれば無常は單なる世間的槪念に於ける主我主情の眼に映ずる情緖的無常哀感でもなければ、客觀的に認識對象化される無常觀でもありえず、謂者無常が吾々の生命・存在已前の本然なる根本的實態であり、同時に現實に存在の絕對的事實

であつて、情感し觀照する其事すらも無常現成相の上の意識經驗の樣態に外ならない。故に禪師は「觀世間生滅無常心亦菩提心也」、「觀心無常、すなはち如來大圓覺なり、大圓覺如來なり……無上正等覺の現成、すなはち無常なり、觀心なり」と無常の絕對相を示されている。從つて、無常を「觀ズル」とは無常の觀想ではありえず、觀想も畢竟無常そのものの上での意識活動の展相であつたからして「能觀所觀にかかはれず、正觀邪觀等に準ずべきにあらざる」無常正見の謂でなければならない。卽ち無常なる自己が無常なる自己として無常現成すること——自己の本來的生命の實態たる無常法をその無常の眞實態の儘を受容し具現實證する自己そのものの生活態でなければならない。一時々々、卽處々々の住法位の行盡という無常隨順のあり方こそ、無常が卽「發菩提心」とか「無上正等覺の現成」と道われ得る所以が存するのである。而して斯かる各々の住法位の盡力の姿こそ佛性常住の事實に外ならない。故に先人が「水ハ流レルガ常住、芽ハ伸ビルガ常住……幾度逢春不變心——春ニ逢フタラ芽ヲフクガ不變心デアリ、ソノ不變心ヲ常住ト言フ」と註するのは、畢竟無常が存在本然の眞實相であり、それが佛性常住の無限なる働きであることを示しているのである。其處に「無常者佛性、有常者善惡一切諸法」の道取がありえたのである。

(一)、從來、道元禪師の發心の基底を無常觀におかれ、然も往々にしてそれが「念々止マラズ、日々遷流シテ無常迅速ナルコト眼前ノ道理」とか「一期ハ夢ノ如シ、光陰ハ早ク移ル、露ノ命ハ消エ易シ。時ハ人ヲ待タズ」等の『隨聞記』に見られる一見主情的咏嘆的無常感の色彩ある處よりして言われているようである。それは參學者の日常に卽して具體的に平易に學道への指向と用心を誨示されるからであつて、移ろひゆく生命無常への單なる嗟嘆に發するものとのみ觀てはその眞意を得ない。むしろ「無常佛性・觀心無常卽如來大圓覺」という『正法眼藏』に於ける無常觀が基底となることに於て、却つて熾烈に隨聞記等の日常具體的なる無常觀の說示がありえていると言うべきである。是事は觀無常が必ず「吾我ヲ離レ」「生死ノ繫縛ヲ離レ」る菩提心の要因としてあること、然も發菩提心とは「境發にあらず、智發にあらず、菩提心發なり、發菩提心なり」とあつて、それが吾々の恣意・强爲を超えて一切を現成せしめる存在本然の實態たる本證のおのづからなる自己發動に外ならず、無常はその無相本然の法そのものの實相を表顯せるものであることよりして明らかとなる。其故に「如何に無常を說・行・證するも却つて無常そのものの性用であり、或現長法身・或現短法身の生きいきたる無常現成の諸相が佛性現成の事實である」と言われるのである。自己は本來的に無常の自己であり、その無常現成が一切悉有を貫ぬく實態であり、正にその住法位の各々の無常現成の事

實が佛性に外ならなかつたのである。是事は禪師の佛性の把握が單なる成佛への可能態とか、或は靈性的價値性とかいう抽象的・形而上的なものではなくして、一切悉有の各々の現成の事實そのものが佛性の現成性（リアリティ）そのものであるとされることと思い合わせれば分明であろう。然して斯かる無常現成の自己の實相なるが故に而今の自己の實存的生命は寸時もゆるがせにしえざる絶對的價値性を有ち、從つてこの本來的實態を味ます情謂的日常相への無限なる返照の眼と、無常を無常の儘に正見し現成せしめる本證受用の無限なる行道（行持）とが必須とならねばならない。禪師に於ける無常觀はあくまで自己本來の生命の眞實態であり、その無常の自己が無常になり切る無常現成の隨順行の外ではありえなかつたのである。

㈠、斯くて無常佛性は「什麼物恁麼來」と性格づけられ、一切悉有の現成が什麼という無相・無常の法の上に緣生し斯くあらしめられている其住法位の事實態であつた。起信論は「忽然念起」とその緣起無常の實相を示しているが、無常が本來的自己の實態であるとは畢竟緣生緣滅の法の運爲を言い、その法の施爲の儘に斯く現成してありえている自己であり一切存在の實相である。斯かる法の不斷に緣起緣滅する無限の流動相、存在の本來的無相の實態こそ無常であり、その法の運爲に現成する一切法が佛性そのものの眞實であるからして「草木叢林の無常なる、すなはち佛性なり。人物身心の無常なる、これ佛性なり。國土山河の無常なる、これ佛性なるによりてなり。阿耨多羅三藐三菩提、これ佛性なるがゆゑに無常なり、大般涅槃、これ無常なるがゆゑに佛性なり」と說かれる。つまり、佛性が常・無常の對待的限定のものではなく現實諸法の各々の住法位の生きいきたる存在の事實そのもの——無常が無常を說きぬく姿が佛性現成の事實であり、佛性の顯現が諸行無常の存在の現實面に無限に自己を開示する姿をいうものである。無常を觀としてでなく本然の相とし、存在の事實として身證する無常現成の隨順行が無常佛性として展開されている處に禪師の所論の眞義とその獨自性が存すると言いえよう（引用省略）。

保坂玉泉氏（本學會理事・駒澤大學總長）は昭和三十九年八月二十八日急性肺炎のため死去された。享年七十八歲。

塩田義遜氏（本學會評議員・身延山短大教授）は昭和三十九年十二月二十一日腦軟化症のため死去された。享年七十六歲。